

小児の健康度の評価と向上に関する研究

分担研究者	木	村	三生	夫(東海大学医学部)
研究協力者	近	藤		朗(平塚市民病院)
	巷	野	悟	郎(都立府中病院)
	高	橋	種	昭(淑徳短大)
	小	林	芳	文(横浜国立大)
	川	井		尚(都立精神医学総合研)
	平	山	宗	宏(東京大学医学部)
	高	倉		巖(東海大学医学部)
	高	石	昌	弘(国立公衆衛生院)

研究の目的

これからのわが国の社会を担うべき現在の、そしてこれからの小児については単に病気を持たないというだけでなく、体力、気力を含めた心身の健康の必要性が強調されなくてはならない。このためには、小児の健康レベルを評価し、それをさらに向上させるための方法を策定すべき必要性が痛感される。

このために小児の健康のレベルを評価するための指標を知り、これを向上させるための具体的方策を立てなければならない。そこで小児の健康の指標を知るべく調査、研究を実施した。この3年間の研究の総括としては、健康度の指標となるべき項目を考え、そのための健康診査を実施してゆくために採用すべき事項を次のごとくとりまとめた。

研究の成績

1. 乳児健診における有効な実施方法の検討(木村, 近藤)

医師会委託による3~4カ月児健診においてアンケートを考案使用し、また健診手引書を作製して実施方法の統一と格差の解消につとめた。アンケート法併用の利点としては、①問診のきき方の差の解消。②ききもれの解消。③母親への教育効果。を確認し、あわせて医師の質についても再考を求められた。また、今後の地域保健サービスとしての健診事業についても、“保健婦の相互のり入れ(保健所と市町村)”, “健診場所の統一”などの必要性も認められた。

2. 幼児健康度調査成績の解析(木村, 巷野, 高橋, 小林, 川井, 高石, 平山)

昭和55年度の厚生省委託調査事業(児童手当協会・日本小児保健協会)の幼児健康調査は前述の研究目的にそったものであるので、その資料を用い、調査項目間の相関等詳細な検討を行ったので、その成績をとりまとめた。

① 病気の既往と発達との関係

幼児健康度調査で対象となった1歳児のうちから抽出した1歳5カ月~7カ月児1,391例について、精神発達項目、粗大運動項目、微細運動項目(各3~4)のそれぞれで1つ以上「いいえ」(できない)の回答のあった者と、すべてに「はい」(できる)と答えた者の各群を比較した。生れた時からの病気、持病のある者は、上記全項目について発達のおくれがみられ、急性疾患による短期入院の既往者では粗大運動におくれの傾向がみられた。かぜをひき易い者や痙攣既往のある者では発達との関連はみられなかった。乳幼児期における疾患はそれが運動機能と関係ないものであっても、入院等の環境や過保護等との育児態度ともからんで正常な発達に影響を与えることを注意すべきである。

② 環境と発達との関係

3歳児1,411人を対象とし、居住環境と発達との関係を調査した。有意差のみられたものとしては次のごとくであった。約束や順番のききわけができる者は都市に高く、町村に低い率でみられ、また母親との適当な関係(母親へ積極的に話しかけ、一方甘えすぎないという子どもの態度、以下母子関係と記す)でも住宅地に高く、農村地区で低くなっていた。昼間の保育者は祖母の場合に、ききわけ、自立心、やる気、母子関係において低

く、保育所の場合は親子の情緒的關係に不満がみられた。同胞（兄弟姉妹）は、ある方がききわけがよく、ない方に自己主張が強く、かつ情緒的に満足の者が多かった。運動機能との関係では、昼の保育者が祖母の者にバランスコントロールの運動や、戸外での協調運動に劣る者の割合が多く、室内での協調運動は祖母のみている子や同胞のある子がすぐれていた。外遊びの多い子は家の中で遊ぶことの多い子に比べてすべての運動機能がすぐれ、また外遊びを積極的に肯定する親の子に運動機能が発達している割合が高かった。これらの成績は当然予想されるところながら、望ましい育児態度がよい結果を生んでいることを改めて示したといえよう。

③ 運動機能と疾病および発達との関連

1～3歳児約9,000人を対象とした。運動機能発達良好群は、病気の既往が少なく、徴症状の発現も少なかった。心理・社会性発達との関連でも運動機能良好群は全体的に不良群に比べ各項目の達成度が高かった。すなわち、幼児の運動機能発達により、病気、心理、社会性の発達等の健康度も推定できると考えられた。

以上の成績は、幼児の健康度に関する検討の実例の一部であるが、心身の関連や望ましい育児環境等の利点が如実に示されており、今後の保健指導上の資料として利用できると考えられた。

3. ベビースイミングの効果に関する調査（木村、高倉）

積極的な幼児の体力増強、健康づくりの1例として水泳教室がありうるが、これらいわゆるベビースイミング（生後3カ月～2才8カ月、平均1才6カ月）参加者65名について母親に対するアンケート調査を行い、親の意識、効果についての評価、家庭医の意見、発育についての追跡等を問い、検討した。家庭医の多くは、1歳以降にはじめる水泳には賛成しており、親は水泳開始後の子どもの変化をよいものと評価していた。

4. 小児の健康度を考えるための指標について（全員）

以上の成績をふまえ、小児の健康度を考え、評価するための指標として、次のごとき諸点が挙げられた。ここでは小児の健康を損ねるおそれのある項目（ハイリスク）と、健康に対する配慮を示

す客観的指標（数字）ないし検査成績等を総合的に評価することを考慮した。

A. 出生前・周産期の医学的ハイリスク

結婚時からのハイリスク（遺伝、母親の年齢、化学的環境等）

妊娠中のハイリスク（妊婦の健康状態、感染、環境等）

分娩時のハイリスク

新生児期のハイリスク 等

B. 育児に関する社会的環境のハイリスク

同胞数・出生順位

養育者

母親のわが子に対する評価能力

育児の相談相手

家族の育児協力

育児に対して母親の感じる負荷の程度

栄養方法（母乳か人工栄養か） 等

C. 出生後の医学的既往・所見からみたハイリスク

診察（健診）結果による疾病、異常の存在（minor or major）

入院を要するほどの病気 の存在

徴症状の存在 等

D. 保健に関する活動力の評価（親の育児に対する関心度）

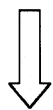
乳幼児健診の受診率

予防接種の受接種率 等

E. 子どもの現症（発達・能力）に関する評価 発達面のチェック（心理と運動能力の両者とも）

育児面（親の側）のチェック） 等

などが挙げられる。これらをチェックリストの形で整理するとき、ハイリスクは少いほどよく、評価は上なほどよいことになる。そこでこれらを採点できるような形式で整理して問診表の形で製表し、既往の問診と、その健診時点での評価をもとに採点してゆく方式を考えてゆきたい。これは具体的にその小児の健康度を総合的に判断する1つの指標となり、心身の健全な発達を期待してゆく上で指導上有益な材料を与えてくれるものと信じられる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究の目的

これからのわが国の社会を担うべき現在の,そしてこれからの小児については単に病気を持たないというだけでなく,体力,気力を含めた心身の健康の必要性が強調されなくてはならない。このためには,小児の健康レベルを評価し,それをさらに向上させるための方法を策定すべき必要性が痛感される。

このために小児の健康のレベルを評価するための指標を知り,これを向上させるための具体的方策を立てなければならない。そこで小児の健康の指標を知るべく調査,研究を実施した。この3年間の研究の総括としては,健康度の指標となるべき項目を考え,そのための健康診査を実施してゆくために採用すべき事項を次のごとくとりまとめた。